
コードギアス 失われし記憶

KTG

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 失われし記憶

【Nコード】

N9406Q

【作者名】

K T G

【あらすじ】

コードギアス反逆のルルーシュ lost colorsのif
小説です。

記憶喪失の少年ライの黒の騎士団篇の続きです

行政特区日本は、後に虐殺皇女と呼ばれるユーフェミアの手によって失敗に終わった。
ブラックリベリオン。

後にそう呼ばれる日本人の一斉武力蜂起
物語はここから始まる・・・

第1話 終わりの始まり

第1話『終わりの始まり』

ブラックリベリオン。後にそう呼ばれる黒の騎士団を筆頭にした日本人の一齐武装蜂起。その戦いの中に少年は体を預けていた。

『戦闘隊長！参番隊も全滅しました！どうすれば！？』

「どうします？藤堂さん」

『ゼロはもはやいない。私だけでは全軍をまとめられん。撤退しかないだろう……』

「そうですか……仕方ありません。僕が殿を勤めます。藤堂さんたちは、少しでも多くの団員を撤退させてください」

『すまないな。恩にきる』

通信をきった少年は、自らが乗る蒼い月下を最前線へと走らせる。

「全員撤退だ！生き残れ！これは命令だ！必ず反撃のときはいずれ訪れる！それまで身を潜めるんだ！」

少年の一声で、辺りで戦闘を繰り広げていた日本人が徐々に交代を始める。それを追うようにグラストンナイツが操るグロースター、そしてサザーランドで構成された部隊追撃してくる。

「ここを通しはしない！」

左腕に備えた輻射波動のエナジーはとうに切れている。後頼りにできるのは、廻転刃刀のみ。グロースター5騎と、複数のサザーランドを相手に戦い抜けるわけもない。

パイロットの技量だけではどうすることもできず数で押し切られ、あつという間に行動不能に陥り、コクピットを射出して戦闘域を離脱した。

（通信を聞いた限りでは、逃げ延びたメンバーの数は絶望的か……結局僕は誰も助けられなかったのか……？）

射出されたコクピットから出た少年は自分を恨む。

過去の記憶を取り戻し、二度と大切な人を失いたくないと誓ったあの日。そしてカレンとの永遠の愛を誓ったあの日。

辺りからはブリタニア軍のものと思われる足音が聞こえてくる。そして、あつという間にブリタニアの兵士によって包囲されてしまう。

「観念しろ！降伏すれば命はとらない！速やかに投降せよ」

（カレン……すまない……約束は守れそうにない）

少年は胸元にぶら下げたある紅い月の形をしたペンダントを握り締めて呟く。そして叫んだ。

「蒼月ライが命じる！！——」

「ここは………？」

ライが目覚めると、そこは彼の知らない場所だった。

「良かった！起きたのね！？」

声のしたほうを見ると、ライのよく見知った顔が涙を浮かべてこちらを見ている。

「ミレイさん？それにリヴァル……シャーリーまで……」

「あなた、3日間も眠り続けていたのよ？みんなも心配してて……」

「3日？僕はそんなに寝てたんですか？それよりも、何で僕はこんなところに？」

「覚えてないの？」

「えっと………」

ライは、3日前の行動を思い起こし始めた。しかし——

「だめだ。思い出せない」

彼の記憶——ユーフェミア副総督が行政特区日本の設立を宣言した、アッシュフォード学園学園祭の日のあと数日間の記憶——が、すっぽりと抜け落ちていたのだ。

「なるほどね。ならば、君はあの日に何か強い精神的なショックを受けた可能性があるね」

それは、部屋に新たに入ってきた白衣を着た男が発した言葉だった。ライはこの男のことを知っている。確か——

「僕の名前はロイド・アスプルンド。軍でナイトメア開発をしているんだ。確か君とは前にいろんなところであつたことがあるよね？」
「スザクの上司でしたっけ？」

「うん。よくわかったね。でも、今は上司というより専属チームの一員かな」

「専属チーム………ということは、スザクはラウンズの一員になつたんですか？」

「さすが！頭の回転が速いね。まだこのことは公にされていないのに僕の一言で見抜いちやうなんて、相当のきれものだよ、きみ。と言つても正式な任命式は来週だけだね。それまでは自由行動！！いやあ〜うれしいねえ〜。おかげで君みたいな逸材に会えたんだから」
「逸材？」

ライにはロイドの言葉がちつとも理解できなかった。なぜ記憶喪失の自分が逸材などと呼ばれているのかまったく分からない。

「君、絶対にナイトメアフレームに騎乗したことあるよ。筋肉のつき方がそう物語っている。どう？僕のところで働いてみない？」

「ロイドさん！」

また一人、ライの知らない女性が増えた。

その女性がロイドの事をひっぱたき、続いて耳を引っ張る。

「いててててて。セシル君、痛いって！」

「自業自得ですー！」

「セシルって………もしかして、オスシの？」

ライは、以前にスザクが『セシルさんのオスシはお寿司じゃない』
と言っていたのを思い出した。

そのときにスザクの顔が真っ白で、まるでこの世の終わりを見たか
のようだったということも。

「あら？あなたつてもしかしてスザク君の知り合い？」

「ええ。同じ学園の生徒会役員ですよ」

「ごめんなさいね、見苦しいものを見せちゃって。私はセシル・ク
ルーミーよ。この人、研究熱心すぎて他人のことをぜんぜん考えて
いないから、あなたの体調も考えずに……とにかくロイド
さん？今目が覚めたばかりなんですから、そういう話は後にしてく
ださいませんか？」

「えー？どうして？」

「教えて差し上げましょうか？」

「付け付けっこうです！じゃあ君、ミレイ君に尋ねれば僕の連絡先
はわかるから、気が向いたられんらくしてね！」

「もう！待ちなさい！！」

ロイドはセシルに追われるようにして部屋から出て行った。

そんな様子を、生徒会メンバーは苦笑いをしながら眺めていた。

「あの……今のつてなんだったんですか？」

短い沈黙の後、ライは口を開いた。

「一応、私の婚約者……かな？」

「え？」

それを聞いて、ライはリヴァルを見た。

リヴァルが『その話にはできるだけ触れないでくれ』と無言で告げ
るような顔をしていたため、ライはそれ以上そのことに突っ込まな
かった。

その後、ライは自分の記憶がなくなっている間のことを聞いた。

行政特区日本の式典での悲劇。

黒の騎士団その他の一斉武力蜂起。

そしてランペルージ兄弟が行方不明であり、カレン・シュタットフ
エルトが黒の騎士団の構成メンバーだったということ。

その話を聞きながら、ライはひとつ思った疑問を口にした。

「さつきから名前が出ているルルーシュとかカレンって誰のことだ
い？」

「……えっ！？」「」

ライの言葉に、3人の顔が驚きに染まる。

「どうしたの？ 僕、何か変なこと言ったかな？」

「どうしたもなにもないわよ！ なんで一番仲が良かった3人の事だ
け忘れているのよ！」

「仲が良かった？」

「そうだよ。お前はルルーシュとよくチェスで勝負していたし、カ
レンはお前のお世話係主任だったろ？ よく二人で出かけていたじゃ
ないか。それに、カレンとの仲もまんざらじゃないって……」

「

「すまない、本当に覚えていない」

ライの記憶には、確かにお世話係主任や、一緒にチェスをしていた
友達がいたと言う記憶はあるが、それが誰かまではわからなかった。
医師の診断の結果、やはりライはロイドの言っていた通り記憶喪失
は精神的なものからだというものだった。

特定の人物の記憶がないというのは、それだけ強く思っていたこと
の表れらしい。

失われた記憶は、普通の生活を送っている間にふと思い出したりす
るので、医者としてはこれ以上は何もすることがないということだ
った。

それを聞き、ライは再び自分の記憶を捜し求めることに決めた。

まずは、一番有力であろうナイトメアの事から。

自分のことを心配してくれる人のためにも、一刻も早く記憶を取り
戻したい。

たとえそれがどのような記憶でも。

ライは、新たな一歩を踏み出した。

第2話 紅と蒼

第2話 紅と蒼

『——以上、先日の反乱で捕らえられたものである。彼らは正当な軍事裁判にかけられ、そこで出た判決のもと、刑を執行することになる——』

「そんな……嘘よ……」

ラジオから流れる放送を聞き、一人の少女が絶望していた。

紅月カレン。黒の騎士団のエースとして知られる紅蓮式式のパイロットである。

『ゼロの双壁』。蒼い月下と共に彼女につけられた異名。だが、そのもう片方の壁は彼女の隣にいない。

彼は先の大戦——ブラックリベリオンにおいて見方を逃がすために単機でギルフォードとグラストンナイツの精鋭に戦いを挑んだ。

そしてそのまま帰ってこなかったのである。

それを知ったカレンにとっての一縷の望みは、先ほどの放送で碎け散った。

読み上げられた捕縛名簿に彼の名前はなかった。それが意味することとはただ一つ——戦死だ。

『特区が成立して日本が平和になったら、僕と——結婚してくれないかな?』

特区記念式典に出向く前に彼からカレンに告げられた言葉。

そして、指輪は買えなかったけど、と渡された蒼い月の形をしたペンダント。

カレンがした返事は、もちろんそれを承諾するものだった。

大好きな彼と一緒に生きていける——特区が成立して、日本独立へ

と向けた第一歩を踏み出せることよりも嬉しいことだった。

しかし、カレンが彼と話をしたのもそれが最後になってしまった。

ユーフェミア・リ・ブリタニアによる日本人虐殺。

それによる日本人の一斉武力蜂起。

ゼロに次ぐ黒の騎士団の頭脳である彼はあの式典で負傷したが、ゼロの補佐のために前線へと出たとカレンは聞いていた。

カレン本人は、扇からの連絡でトウキョウを離れたゼロを追って神根島に急行。

そこでゼロの正体、そしてギアスの存在を知った。

絶対遵守の力をもつギアス。

今までの自分が偽りのものだったのかもしれないという不安に駆られ、カレンはその場から逃げ出してしまった。

その後黒の騎士団の生き残りと言流したカレンは、さらなる悲しみを受けることになった。

『すまない……紅月……』

ト部が話し始めたのは、愛する人の消息についての話だった。

『ライは生きています！藤堂さんたちのようにブリタニアに囚われただけです！』

その発言には何の根拠もなかった。

ただ『約束をしたんだから死ぬはずがない』というだけの理由。その約束も今ははかなく、実現できないものになってしまった。

カレンは唐突に走り出した。

向う先は紅蓮。

「紅月！何をするつもりだ！」

彼女にはト部の声は届かない。

彼女の頭にあるのは、やさしかった彼の声と、ブリタニアに対する復讐心のみだ。

（彼を……ライを返してよ！！）

怒りは判断を鈍らせる。

どんなことにおいても言われることだが、まさに今のカレンはそうだった。

もともと感情的になる部分もあったが、今まではゼロによってそれも抑えられていた。

だがゼロという存在がいなくなった今、復讐の権化となった彼女を止められるものはいない。

そんな彼女を紅蓮の前で止めにかかったのは緑髪の魔女だった。

「C・C・！邪魔をしないで！！」

「落ちて着けカレン。お前がやろうとしていることは何も生み出さないぞ？」

「あんたなんか私の何がわかるのよ！！」

「ああ、何もわからないさ。わかりたくもない。お前のような自分の事ばかり考えるようなやつのはな」

「だったら早くどきなさいよ！私にはやることがあるんだから！」

「どくわけには行かないな。なんせこれはお前の大切な人からの頼みだからな」

「えっ？」

C・C・のその一言に、カレンの怒りは一気に失せた。

「だいぶ前に言われていたんだがな。『もし自分に何かがあつたらカレンは必ず無茶をする。そのときは、君が止めてくれないか？』」

だと。ピザ10枚の破格報酬で承諾してやったさ。本当はこんなことをする気はさらさらなかったが、状況が状況だ。お前までを失うわけにはいかない」

「ライが……そんなことを……」

カレンはその場に崩れ落ちた。

彼女が今まで我慢していた涙がまるで滝のように流れ出す。

（涙が……止まらない……）

「泣け、カレン。こういうときは、我慢せず流すのが一番だ」

その言葉に完全にストッパーが外れたのか、カレンはC・C・のもとで大泣きした。

ゼロの親衛隊隊長である紅月カレンとしてではなく、貴族の令嬢であるカレン・シュタットフェルトとしてでもなく、一人のカレンとして泣いた。

この世で一番大切であつた彼のことを思つて。

第3話 シミュレータ（前書き）

お久しぶりです

だいぶ間が開いてしまいましたが、第3話の更新です

第3話 シミュレータ

ライが病室で目を覚ましてから3日が過ぎた。

体調が回復したライは、言われたとおりにロイドの元を訪れようとしていた。

アッシュフォード学園に来る前の自分の事などもうどうでもよくなっていたのだが、ナイトメアに騎乗することになんともなく興味を引かれたのだ。

親友の一人であるスザクがナイトメアに乗っていたということもあるが、なんとなくナイトメアという存在に、懐かしい感じを抱いていた。

今までアッシュフォード学園で生活していた中で、何度かナイトメアに関係のあることがあったが——学園祭でのガニメデの使用や、ロイドとあったことだ——一度もそんな感覚になった記憶がなく、少し戸惑っていたのも事実だ。

それでも、この不思議な感じを解決できるなら………と思い、ロイドの誘いを受けることに決めたのだ。

「こゝんにちは〜！よ〜こそナイトオブセブン直属開発機関キヤメロットへ〜！」

「あ………どうも………」

ライを出迎えたのはハイテンションのロイドだった。

「待ってたよ〜、待ってましたよ〜。さあさあ、はやくシミュレータに乗ってよ」

「ロ・イ・ドさん！物事には順序があるって言いませんでしたっけ！？」

強引にライを連れて行こうとするロイドとライの間に、セシルが割

り込んできた。

そしてその場で説教を始めてしまう。

（大丈夫なのかな、ここは。たしかロイドさんがここの主任だと聞いたけど・・・）

そんな二人を見ながら、ライは一抹の不安に駆られるのであった。

「ライ。久しぶりだね」

二人の様子をあたふたしながら見ていたライに声をかける一人の少年が現れた。

「スザク・・・」

枢木スザク。

先日、ナイトオブセブンに任命された初のナンバーズ出身のラウンズ。

そして、あのユーフェミアの騎士だった男だ。

ミレイたちから記憶を失っている期間について教えられたライはスザクとどう接すればいいかわからなくなっていた。

自分の主君——そしておそらく愛していたであろう人を失ったばかりなのだから。

「ロイドさんから聞いたんだけど、ナイトメアに乗ったことがあるかもしれないんだって？」

「えっ・・・まあ、そうらしいね。なんでも、筋肉のつき方がそれっぽいとかなんだとか。それで、呼ばれたから来たんだけど・・・」

「ごめんねライ。この人たち、僕が会う前からこんな感じらしくて逆にそういうところがいいところでもあるんだけど」

スザクは笑みをもらしながら言った。

（スザク・・・もしかして強がってる・・・？）

ライはそんなスザクのわずかな変化に気がついていていた。

彼の自然な笑顔は、アッシュフォードでの生活で何度も見てきた。だから、今のスザクの笑顔が表面だけのようなものに見えるのだ。

「ロイドさん。ライが困ってますから、早く用件を済ましましょう」

よ」

（だが、スザクがそう振る舞っているということは、この間に何かに触れてほしくないということだろう）

ロイドとせしめるのケンカを仲裁しているスザクを見ながらライはそう思う。

それならば、何も疑うことなく今までどおりに接すればいいだけだ。

「それじゃ、シミュレーションを始めようか」

なんとか復帰したロイドに促され、ライはシミュレータに乗り込んだ。

『シミュレータを起動します』

セシルの声がナイトメアのコクピットを模したシュミレータ内に響く。

正面の画面が切り替わり、砂漠が映し出される。

『じゃあ、まずはその辺で動いてみてよ』

「わかりました」

ロイドの言葉を聞き、ライはアクセルペダルを踏んだ。

強く加速しすぎず、ちょうどいい具合の加速具合。

それに伴って移動する景色。

ライは無意識のうちに武装をチェックして、アサルトライフルを構えた。

「ロイドさん、武器を使ってもいいですか？」

『いいけど……君、やっぱりナイトメアに騎乗したことあるよね。』

まだ何も教えていないのに完璧にそこまでこなしちゃって

「あれ？なんでできたんだろう？」

『まあ、そんなことはどうでもいいんだけどね。君が優秀だということとはよくわかったし。セシル君、次のシミュレーションに移れる？』

『いつでも大丈夫です』

『じゃあ、お願いするよ』

そして再び正面の画面が切り替わる。

場所はどこかの山中のようだった。

『これから、画面にナイトメアが複数現れるからそれを撃破してね。武器はどれを使ってもいいから』

「わかりました」

『戦闘管制を始めます。前方に熱源反応あり。敵ナイトメア、無頼3騎を確認。現状の兵力で敵を殲滅せよ』

「イエス、マイ・ロード」

何の違和感もなくブリタニア軍内で使われる返事をし、ライは手元のアサルトライフルとスラッシュハーケン、スタントンファで無頼に戦いを挑みにいった。

まずは一騎目。

敵機から放たれる銃弾を必要最小限の動きでよけていき、十分接近したところでアサルトライフルで攻撃する。

直後、後ろから迫ってきた他の無頼のスタントンファでの攻撃を空中へと跳躍することにより避けて、そのまま空中からスラッシュハーケンで行動不能に追い込む。

そして最後の無頼が攻撃態勢に入る前に、スタントンファで撃破した。

そんなライの動きを外のモニターで眺めていた3人は驚きすぎて言葉を失っていた。

既に、次に出てきた5騎のブライトの先頭を始めている。

「……想像以上の出来だよ、彼。スザク君だってサザーランドの設定であそこまで動けないでしょ？」

「そうですね。ランスロットでならあの動きはできますけど、サザーランドでやれといわれるとちよつと……」

「でも、彼の戦い方には少し無理がありますよ？あんな戦い方をし

てしまつては、すぐにサザーランドの駆動系は――」

「使い物にならなくなるだろうね。ンフフフ、だからこいいデヴァイサーってことだよ！それに、もう実験機は手に入ってるのだから、すぐにでも彼にはこの所属になつてほしいね！」

ロイドはとても嬉しそうだった。

かつて、スザクがランスロットで高い適応率を示したとき以上の喜びようだ。

「もしかして、ブラックリベリオンの際に手に入れたあの機体を使うつもりですか？」

「その通りだけど、何か問題でも？」

「でも、あれは黒の騎士団のナイトメアですよ？勝手に使っちゃ――」

「大丈夫だよ。シュナイゼル殿下から許可はもらっているから」

「あの、先ほどから話に出ている機体ってなんのことですか？」

「ああ。スザク君にはまだ話していなかったね。実は、ブラックリベリオンのときにトウキョウで黒の騎士団のナイトメアを1騎手に入れたんだ。他のナイトメアはエナジーがなくなったときに自爆していたのに、それ1騎だけ破壊されずに残っていたらしいよ。それをアヴァロンで僕たちが回収したっていうわけ。見てみたい？」

「……はい」

ロイドはセシルをライの乗るシミュレータのもとに残してスザクを例の機体のもとへと案内した。

その機体は現在整備中のランスロットの脇に並べてあった。

スザクが今まで見てきたナイトメアの中で、最も恐れたといつても過言ではないという機体。

蒼い塗装で異形の形をした左腕をもち、カレンの乗る紅蓮と共に最強のコンビネーションを誇っていた機体だった。

「ゼロの……双壁……」

スザクは神根島でゼロ――ルルーシュと対峙したときを思い出していた。

彼はギアスを使って他人の意志を捻じ曲げ、自分の目的を果たそうとしていた。

黒の騎士団と同じく日本解放を目指す日本解放戦線までも駒として扱い、利用し、使い捨てた。

（この機体のパイロットも、ゼロに利用されていただけなのだろうか……）

ゼロの双壁として、圧倒的な戦力であったこの蒼いナイトメア。

しかし他の騎士団のナイトメアと違って、このナイトメアによって破壊されたナイトメアのパイロットは高確率で脱出して命は無事であった。

スザクはそんな姿に自分自身を投影していた。

（彼も僕と同じで人を犠牲にしたくなかったから黒の騎士団に所属していたのかもしれないな……）

出会う場所さえ違っていたならば、きっと親しい友人になれていたに違いないとスザクは複雑な気持ちで蒼いナイトメアを見つめていた。

「お疲れ様、ライ君。ごめんなさいね、無理をさせちゃって」

「いえ……別にかまわないです……」

ライはシミュレータ内のサザーランドの駆動系が焼き切れるまでシミュレーションを続けていた。

実際、サザーランドの性能以上の動きをしたせいでそのときが訪れるの早かったが、ライの体は汗まみれになっていた。

「それよりも、どうだった？シミュレータに乗ってみた感想は」

「そうですね……少し物足りなかった気がします」

「えっ?!」

「なんというか、自分の思うようにナイトメアが動いていなかったような気がするんです。これって、僕の力不足ってということですか

？」

「えっと……」

予想外の言葉に、セシルは言葉をなくした。

もちろん、ライの力不足だということはない。

力不足どころか、並大抵のパイロットよりも腕は上だった。

ただ単に、その腕にサザーランドの性能がついてこなかったただけである。

「ライくん！こっちに来てくれるかなあ？」

ロイドの声が遠くから二人のもとにまで聞こえ、二人はロイドのもとへと向った。

「ライくん、シミュレータ乗ってみてどうだった？」

先ほどのセシルと同じ質問をロイドも繰り返す。

「さつきセシルさんにも言ったんですけど、なんだか自分の思うようにナイトメアが動いていなかったような気がして………ロイドさん？」

ライは思わず言葉をとめた。

ものすごい笑顔で自分を見つめるロイドに気がついたからだった。

「やっぱり君はすばらしい人材だよ！！思うようにナイトメアが動いていないと感じたならば、君は相当の実力を持っていることになるんだよ？動かしづらかったのは、ただ単にシミュレータにロードされていたサザーランドの性能では君が満足に戦えなかっただけ。それ相応の機体——たとえばこの蒼いナイトメアがあれば、君の力は100パーセント引き出せることになる！！」

嬉しそうに叫ぶロイドがライに示した先には、ゼロの双壁と呼ばれたナイトメアがあった。

『これが……僕専用のナイトメア……』

『これで私たち、お互いに背中を任せて戦えるわね』

(……！？なんだ今のは?!)

ライが蒼いナイトメアを見た途端に頭に浮かんできた会話。

片方はライ自身の声だった。

もう一人の声は知らない。

なにか懐かしい感じがして、心が温まったかのような気がした。

しかしライにはそんな会話をした記憶はない。

そのことが、最近の1週間程度の記憶をなくしたライをさらに混乱させていた。

「で、ライくん。これに乗ってみたいかい？」

ライが混乱していることにもきづかずに質問を重ねるロイド。

ライはその質問について考えることで、今浮かんできた疑問をとりあえず忘れることにした。

(これに乗るということは、スザクのようにブリタニア軍に入ってテストパイロットになるということかな？もしそうだとしたら、僕の保護者でもあるミレイさんを心配させることになる。でも——)

——それがミレイさんたちを守ることに繋がる。

軍に入りブリタニアのために戦えば、必然とブリタニア臣民であるミレイたちの安全を守ることに繋ってくる。

それに日本人を救いたいと望むスザクの役に立てるかもしれない。

ライの決意は固まった。

「はい。僕をテストパイロットでもいいのでここに入れてもらえますか？」

「やったー！！！！じゃあ、すぐにでも実機でテストを——」

「ロイドさん！ダメですよ無理させちゃ！」

「えー？なんで？」

「教えて差し上げましょうか？」

「遠慮しておきます」

ライの返事に、もはやいつもどおりとも言える応対を繰り返すロイドとセシルを横目に見ながら、スザクがライに声をかける。

「本当にいいのかい？今までどおりに学園で記憶をさがすこともできるんだよ？」

「過去の事なんてもうどうでもいいんだ。自分が何者なのかは気になるけれど、今の僕には大切な人たちがいる。記憶のない僕を受け入れてくれたミレイさんやスザクたちだ。だから、記憶の事はもう気にしなくてもいいよ」

「わかったよ。危険な仕事だからおめでとうとは言わない。でも、僕は歓迎するよ」

「ありがとう、スザク」

二人は互いに手を伸ばし、握手をした。

後に帝国最強のコンビとなる二人組みが誕生した瞬間だった。

第4話 ある日 ある場所で

「おいト部。洗濯物を片付けろ」

「ト部さん、料理作ってもらえますか？」

「ト部。ピザを買って来い」

「ついでに掃除もやってもらえませんか？」

「ト部。服を買って来い」

「ああ、あと——」

「お前ら、いい加減にしろよ——！」

エリア11のアキタにある一軒家での出来事だった。

世間一般で『ブラックリベリオン』と呼ばれる日本人の一斉蜂起から半年近くが過ぎた。

その一軒家には黒の騎士団の残党——もはやその規模は残党と呼ぶに等しくなっている——の3人が、隠れ家として生活をしていた。

各地を転々としながらの生活を始めてほぼ半年。

家に響く声はいつも同じだ。

「お前らな、自分の事ぐらい自分でやれよ？紅月もC・Cも年頃の女の子なんだからもっと節度を保ってだな……」

ト部巧雪。

奇跡の藤堂と呼ばれた藤堂中佐の直属部隊である四聖剣の一人。

そんな彼もここ半年の逃亡生活の中で、2人の少女からまるで召使いかのように扱われ、心底参っていた。

どれだけ言っても二人は生活態度を変えようとしない。

二人とも着替えたらず替えっぱなしで下着やら何やらを散らかしっぱなしだし、普段の姿もラフすぎて露出度が高すぎる。

（俺、男として認識されてないのかな……）

ト部の切実な悩みだった。

「いいじゃないかト部。それともなんだ？お前は未成年のか弱い女二人に、料理や掃除を押し付けるきか？」自称魔女、C・C。彼女と対等に口喧嘩ができたのは、黒の騎士団の中ではゼロしかない。

「いや、そうじゃなくてだな。自分のものは自分で片付けると言っているんだ。料理ぐらいなら俺がやってやる。だが、自分が着ていた下着や、自分で出したゴミぐらい自分で始末をしるよ。そう前から言ってるだろ？」

今まで何度言っても止めなかったことから、きつと今回もだめだろう。

そうは思いつつも、口に出さずにはいらなかった。

「はあ。こんなときにゼロや戦闘隊長殿がいてくれれば——」

「ト部——」

思わず呟いてしまったト部を、C・Cが怒鳴り付ける。

そこには先ほどまでの半ばからかうような雰囲気など微塵もなく、真剣そのものだ。

ト部も、今しがた自分がしてしまったことに気付き、カレンのほうを見る。

今は昔のような元気を取り戻していたカレンだったが、ほんの1ヶ月前までは、恋人を失った悲しみでまるで死人のように空っぽだった。

そのころはさすがのC・Cも氣を使っでいて、からかうようなこともなかったし、そのときから、カレンの前で戦闘隊長であったライのことについて触れることはご法度になっていた。

また前のように脱け殻のようになられては困る、と二人は警戒をしたが、そうはならなかった。

「そうね……ライがいたら、今頃私は彼と二人で新婚気分でも味わいながら逃亡生活をしてるかもしれないわね。毒舌魔のC・Cも、味覚音痴のト部さんもないところで幸せに逃亡してると思うわ」
「幸せに逃亡など、矛盾していることを言ったカレンだったが、かつ

てのように落ち込むことはなかった。

「カレン……もう大丈夫なのか……？」

「大丈夫も何もないわよ。私がいくら悲しんだって、ライはもうかえってこない。だったら、私が彼の分までも笑って過ごそうって決めたの。それが、私にできる彼へのプレゼントだと思うから……」

肌身離さずいつももっている蒼い月のペンダントを胸元で握り締め、カレンは言った。

もう彼女に迷いはない。

自分でそうすると決めたのだから。

そんなカレンの強い決意に満たされた空気も、一人の魔女によってぶち壊される。

「……成長したな、カレン。胸が無駄にでかくなっただけでなくて良かったぞ」

「はあ！？それ、一体どういう意味よ！？」

「そのままの意味だが？今までお前に気を使って言っていなかったが、ライのやつは巨乳は嫌いらしぞ？よかったな、今あいつがいなくて。あいつが知っているお前は『許容範囲よりやや大きいカレン』のままだ。今の『でかすぎて手をつけられないカレン』を見られなくて幸いだっとな」

「馬鹿なこと言わないで！ライは私の胸の事をそんな風には言ってなかったわ！『僕はカレンの胸は好きだけど？』って——」

「ほう。あいつはそんなことを言っていたのか。それはまた新発見だな。あいつもそんな恥ずかしいセリフを普通に言える男だったか。どこぞの童貞坊やとは大違いだ——」

いつもどおりといえる口げんかの内容が、なんだか聞いてはならないようなものになってきたと感じた卜部は、早々と家の外に脱出した。

家を出た卜部は、少し離れた場所に住んでいる隠れ住んでいる騎士団の同胞のもとへと向かっていた。

現在、日本全国各地に散らばる騎士団員との連絡基地にもなっている。

とはいっても、連絡を取ったとしてもできることはただ互いに勇気付けあうだけ。

ゼロを失った今、具体的な対策など何も取れない。

今は、ト部と共に生活する二人が喧嘩を始めたときの避難所として機能していた。

「すまん、またしばらくここにいさせてくれ」

「ト部さん、またですか？なんならもうここに住んじゃいます？」

現在、黒の騎士団情報担当の青年が笑いながらト部に問いかける。

「いや。あの二人だけ放っておくと何をしかすかわからない。

二人とも未成年であることに変わりはないんだから、年上の俺が保護者として面倒を見てやらなきゃゼロに申し訳ない」

「ははは。それもそうですね。……そういえば、興味深い情報が入ってますよ」

「なんだ？」

「中華連邦のデイトハルトさんからの情報です。彼もまだ十分な情報を得られなかったようですが、あの枢木スザクが直属の部下を作ったらしいですよ」

「……そうか」

枢木スザク。

ゼロを捕らえ、それを皇帝に突き出すことによって帝国最強の騎士、ナイトオブブラウンスに就任した日本人。

何度も黒の騎士団の活動を阻害してきた最大の敵とも言える存在。

「だが、今の俺達にとってはどうにもできない情報だな」

「ええ、残念ながら。一応知っておいてください程度の情報だそうです」

——いずれゼロが復活したら、必ず枢木はここに来る。

C・C・とカレンからゼロの正体を聞いていたト部は、確信をもつてそう思った。

今は関係ないにしろ、必ずいつか対峙するときにやってくる。

（戦闘隊長殿がいてくれたら、戦力的にも負けていないんだが……）
彼がもうこの世にいないとは知りつつも、そう思わずにはいられない。

それだけ彼の存在が大きかったということなのだ。

「その部下について何かわかったら、知らせてくれ。いづれゼロが復活したときに備えて情報を集めておくに越したことはないからな」
「わかりました」

それは、ゼロが復活する約5ヶ月前のある日の事だった。

第5話 復活の日

「ギルフォード卿！バベルタワーはどうなりましたか！？」

トウキョウ租界の政庁の一室に、銀髪の少年が駆け込んできた。

彼がここまであせっている理由はひとつ。

親友とも呼べる二人が、黒の騎士団の残党によって襲われたバベルタワーにいつているということをミレイから聞いたからだ。

「おちつきたまえ、アッシュフォード卿。君の友人があそこにいるということは先ほどの連絡で聞いた。今も軍がカラレス総督の元、テロの鎮圧を行っている。大丈夫さ。必ず君の友人は無事に帰ってくる」

客将としてエリア11に赴任しているギルバート・G・P・ギルフォードの言葉に、しかめ面を見せる青年の名は、ライ・アッシュフォード。

ナイトオブセブン、枢木スザク直属の部下であり、記憶喪失の少年である。

ブラックリベリオン時に記憶とIDをなくし、今や没落貴族となったアッシュフォード家に養子として引き取られた——というのが、彼の公式の記録だ。

欧州での戦闘がひと段落し、近々このエリア11に就任することになりそうだというナナリー・ヴィ・ブリタニア皇女殿下のために、エリア11の視察に来ていた。

その際、スザクの後押しもあってアッシュフォード学園に復学。かつてのスザクのように軍務をこなしながらの学園生活を送っていた。

そのアッシュフォード学園で再会した、彼の記憶からこぼれてしまった兄弟。

その二人が今、黒煙の上がるバベルタワー内にいる。

（ルルーシュ。口口。無事でいてくれ……）

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる。貴様らは——死ね！」

「yes, your highness!!」

バベルタワー内では、ライが無事を祈る少年が真実の記憶を取り戻し、再びブリタニアに反旗を翻そうとしていた。

——ゼロ。

黒の騎士団のリーダーであり、公式的には1年前に枢木スザクによって捕縛されて処刑された人物。

しかし実際は、彼とギアスの契約を結んだC・C.を捕らえるために、第98代ブリタニア皇帝シャルル・ジ・ブリタニアの手によって記憶を改変され、偽りの弟と共にアッシュフォード学園で生活していた。

しかしそれも今日で終わりを告げる。

再び自分を道具として扱ったブリタニアを壊すために、戦いを再開するのだ。

「C・C.。ライはどうした？」

彼が既に黒の騎士団にいないことは知っている。

だが、ルルーシュはそのことを聞かずにはいらなかった。

「ルルーシュ……あいつは……」

C・C.は、彼女らしからぬ寂しそうな顔を浮かべて、言葉を止め

る。

その姿を見て、ルルーシュはC・Cの体を抱きしめ、耳元で真実を告げた。

「……ライは生きている」

「何!？」

ルルーシュの信じられない言葉に、C・Cは驚愕した。

何をバカなことを言っているのだ、と。

1年前、ブリタニアが公表した拘束者リストに名前がなかった彼を死んだことにしたのはC・C達だ。

確かに、あの発表で名前が出なかったからといってそれがそのまま死に繋がるわけでもない。

それでも、あのライが1年間もカレンのことを放っておくはずがない。

彼女のためなら何があっても駆けつける。

そんな男が今も生きているなんて、信じられることではなかった。

「何があつたのかはわからない。だがあいつは今、ブリタニア軍人だ。それも、ナイトオブセブン直属の部下としてな」

ルルーシュがそのことを知ったのは、偽りの記憶を携えてアッシュフォードに戻ったとき。

当初は純粹に、ナイトオブブラウンス直属の部下になったことを凄いと思ったものだった。

だが、真実の記憶を取り戻した今となっては、そのことに疑問を持つようになっていた。

（ライの政治的手腕も、パイロットとしての腕も最高レベルだ。あの男が俺と同じようにライの記憶を書き替えたのだとしたら、なぜラウンズの部下から始めさせた?それになぜ、中途半端に俺とナナリー、そしてカレンを記憶からはずしたんだ?)

ルルーシュの考察は、C・Cと別れてバベルタワーの管制室にカレンが入ってくるまで続いた。

「カレン。21階に向かえといったはずだが？」

「私の質問に答えて、ルルーシュ。あなたは、私やライにギアスを使ったの？」

実際カレンにもギアスを使ったことがあったが、それはシンジユク事変の直後に彼女の正体を知るために使っただけで、彼女の意志を曲げるようなことはしていない。

カレンがゼロと共に行動したのは紛れもなく彼女自身の意志であり、ライもまた同じだった。

「その質問に何の意味がある？もしカレンがギアスにかかっているのなら、神根島で俺を見捨てて逃げることはなかったはずだが？」

「それは……」

カレンにとって否定しようがない事実。

尊敬していたゼロの正体が同じクラスのルルーシュだったということを知って気が動転していたとはいえ、ゼロのことを見捨てたことに変わりはないかった。

「でも！あなたがあのときに戦場を離れなければ、彼が——ライが死ぬこともなかった！今も私の隣で笑顔でいてくれたはず！あなたは私たちから……日本人から未来を奪ったのよ！！」

バニーガール姿になっけていても、体のどこかに必ず身につけている蒼い月のペンダント。

それを握り締めながら、カレンはルルーシュに問いただす。

（カレンはまだライの事を想っている………なら、真実を告げるべきではないな）

黒の騎士団とアッシュフォード学園という2つの場所で、二人の恋路を見てきたルルーシュ。

第3者として二人を一番見てきたからこそ、二人の愛情の深さは誰よりもわかっていた。

「カレン……あのとき俺がしたことを許してくれとは言わない。俺の事を殺したかったら、手に持っている銃で撃てばいい。俺はそれ相応の事をした自覚は十分にある」

「それは……」

確かに、ルルーシュはライの仇といってもいい存在かもしれない。しかし同時に、日本人の希望であるゼロでもあるのだ。

そんな彼を殺すなんてできるはずもなかった。

「ルルーシュ。あなたには死という罰は軽すぎるわ。もう一度、あなたの手で日本解放という夢を見せて。1年前、あなた自らが壊したその夢を——その奇跡を」

「ああ、もちろんだ。彼の——ライの名に誓おう。俺は、二度と過ちを繰り返さない。ライがいなくなって気がついた。俺はもう、ナナリーのためだけに戦っているわけじゃない。俺を信じてついてきてくれた全ての人たちのために戦おう」

——そしてナナリーも、ライもこの手に取り戻す。

今度こそ、1年前のような悲劇は起こさせない。

新たな誓いを自分自身に刻み込み、魔王は再び立ち上がった。

大切な人を救うために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9406q/>

コードギアス 失われし記憶

2011年4月30日02時06分発行